

独鈷山採集会報告

林 一 六

昭和53年7月2日、小県都和田村にある独鈷山で採集会を行った。独鈷山は標高1,286 mでほとんどの部分をコナラ、クヌギ、ミズナラの二次林で被覆されていた。頂上附近ではカラマツの植林となっていた。採集のルートは、富沢という部族から沢沿いに頂上に向かった。この道は頂上を越えて塩田側へ通じているが、塩田側は急峻でフロラもかなり変わっている。当日は車の関係もあって同じ道をひき返した。

前日、裏教場の「こくや旅館」に泊まり、翌日8時ごろ出発した。宿泊のメンバーは望月、和田、白井、近藤、久道の各氏の幹事の林であった。当日は諏訪方面からのメンバーと中山氏が加わってにぎやかな会となった。地元の望月先生に植物を教わりな

がら登り、楽しい中でとても勉強になった。頂上附近で望月先生がミスミソウ（スハマソウ?）を見つけられ採集した。途中でカテンソウがかなり沢山あり、それも採集した。以下フロラの一部を採集品から記すと次のようになる。

（ハイ）イヌガヤ、クマシデ、コウゾ、カテンソウ、シナノナデシコ、アブラチャン、ミスミソウ（スハマソウ?）、ツルネコノメソウ、トリアシショウマ、キビナワシロイチゴ、ニガキ、ナツグミ、カノツメソウ、ヤブニンジン、ホタルサイコ、キヌタソウ、ニシキウツギ、ヤブデマリ、ツルニンジン、オクモミジハグマ、ミヤマホウソ、トボシガラ。

〔植物ニュース〕 35. モノドラカンアオイ

Heterotropa monodraeflora E. Maekawa

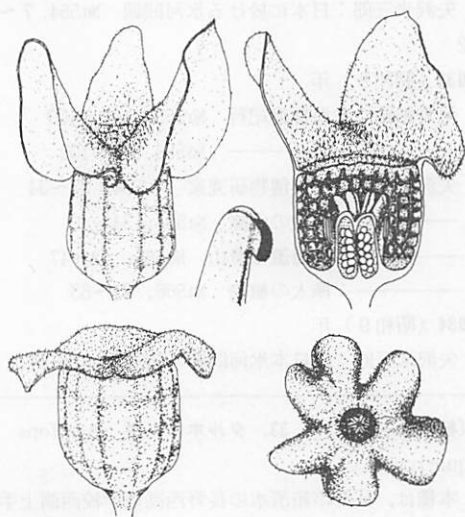
1975年に初島彦博士がモノドラカンアオイを採集されて以来、その自生地が再確認されないままであったが、今春、幸いにしてその自生地を確認できたので報告する。この種は、八重山諸島西表島の古見岳（標高470m）付近に自生がみられるのだが、この山には道もなく急峻でなかなか近づけない。藪こぎしながら進んでいくと標高300m付近で見馴れぬカンアオイをみた。花を見てすぐにそれがモノドラカンアオイではないかと思ったが、その後中島邦雄氏に確認してもらった。自生地は、主に溪流沿いの急斜面で、観察した限りでは山の鞍部には見られなかった。個体密度は大きいが生地が狭い為種としては個体数は少ないように思われる。大株になりやすいとみえて5～6花をつけたりばな株も多くみられた。

この種に関しては、まだ形態の観察が十分でなく変異についてもほとんど記録がないので、改めて記載と花部の形態のスケッチを発表しておきたい。

葉は；心臟形で裏は濃赤紫色、表面には光沢があり、葉縁と葉裏脈上には粗毛が生える。葉身の大きさは、多くは長さ6～9 cm、幅7～8 cmである。

花は、全体として長さ15～20 mm位、萼筒は直径8～10 mm、長さ8～9 mm位の円柱形である。萼裂片の大きさと形にはかなり変化がみられ、長さ6～10 mm位で両側へ大きくそり返るものからほとん

どそり返らないものまでである。萼筒内部は網状の突出模様がみられ、萼筒入口には高さ2～2.5 mmほどの口輪がみられる。萼裂片基部から萼筒入口付近にはほとんど模様がなくなるのっぺりとしている。また、萼筒から萼裂片に移行するところには少しくびれがみられる。雌ずいは6本で、雄ずいは12本で、退化花弁はみられない。



（若原義文）